

劇評

一人芝居「フォーク 回想」

奥田洋子

原作：ジョウゼフ・コンラッド

作・翻訳・脚本：岡田久早雄

出演：古口圭介（演劇組織 夜の樹）

照明：佐瀬三恵子

制作：奥田英子（演劇ユニット G.com）

2012年8月10日から13日まで、新宿の実験劇場「絵空箱」で、ジョウゼフ・コンラッド原作、岡田久早雄作・翻訳・脚色の一人芝居「フォーク 回想」が、七回にわたって上演された。

江戸川橋にある「絵空箱」は、約40坪ほどの「実験的フリースペース」で、ふつうの劇場の舞台に相当する空間の正面に数卓のテーブル席、さらにその後ろに数列の観客席と、合計約50席ほどの客席がある小さな劇場である。観客席の後ろにはカフェバーがあり、演劇以外にも展示やライブの場として使われている。

「フォーク 回想」のセットは、舞台に相当する空間の真ん中にテーブルが1卓、椅子が2脚置かれているだけのシンプルなセットで、場面の転換は、役者が椅子の位置を変えることで視覚的に示唆されていた。

岡田氏によると、「フォーク 回想」を読んだのは大学生のころで、20年近く熟成させて今回の公演に漕ぎ着けた。初稿ができたころに東日本大震災があり、「津波でんでんこ」（津波が来たら、各自でんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ）という表現を知り、自然の脅威の非情さの前には、人もまた自然の一部として自分の命を自分で守るために非情とならざるを得ないのだという冷徹な事実を知り、それを演劇をとおして観客に垣間見せたいと思ったと言う¹。

岡田氏はまた、公演終了後に彼のブログの中で、お盆の時期と重なったこともあるが、人を引き付ける何かが欠けていて観客が少なく、成功したとは言い難いと述べている。岡田氏によると、特に新米船長の「私」と引き船の所有者のフォークとの確執を描いた物語前半の場面を演じた第1場から第3場で、ストーリー・テリングの力が不足していたという。その一方で、物語の後半、フォークが船長に何年か前に南極近くで乗船していた蒸気船が故障して漂流し、生き延びるために人肉を食べた話をする場面を演じた第4場は、よかったと思うと語っている²。

演劇に関してはまったくの素人であるが、筆者自身はひとりの観客としてこの公演にそれなりの満足感を覚えた。確かに前半やや弛緩した部分があったが、この部分は、吉岡栄一氏が『亡命者ジョウゼフ・コンラッドの世界』³の中で、「フォークと『おれ』との誤解から和解にいたる過程で、物語の流れがよどみ、停滞し、冗漫さを露呈するのは、小説構成上の致命的な欠陥のひとつ」(223)であると指摘していることから分かるように、原作においてもやや冗漫な部分なのである。それに対して後半の第4場は、脚本の上でも、また船長を演じた古口圭介氏の演技の上でも、観客を引き込む力が感じられた。ただ、私が見た8月12日の公演では、この第4場で背景に音楽が流され、そのためにときにはセリフが聞き取りにくいこともあった。波の音などの効果音を、抑え気味に流すくらいにした方がよかったのではないかと思う。

この作品は、原作では杵物語の語り手がロンドン近郊のテムズ河畔で、今はもう五十を過ぎた杵内物語の語り手の船長からフォークの話の聞き、それを読み手に語る構造になっている。今回の上演では、船長が杵物語の語り手となり、フォークから聞いた話を観客に伝える。作品を読んでいるときにはそれほど強く意識していなかったが、一人芝居を見ていると、語り手としての船長の一貫した存在を強く意識させられる。第3場から第4場に移ると、語りの内容は時間的に何年か遡り、さらに、場所的にもシャムから南極近辺に移り、視点もフォークの視点に移動する。にもかかわらず、興味深いことに、一人芝居では語り手のみが舞台上にいたので、観客は語っているのが船長であることをかなり強く意識し続けるのである。

最後に、私が最も興味を抱いたことのひとつは、今回のようにコンラッ

ドの作品を日本のフリンジの劇場で取り上げることに、どのような意味があるかということであった。

確かに欧米ではここ数年コンラッドの小説を、オペラなど他の芸術形式に置き換えるか、もしくは翻案化した例が目につく。例を挙げると、人形劇『闇の奥』(2007)⁴、劇画版『闇の奥』(2010)⁵、『ロード・ジム』の舞台をタイタニック号に移した翻案小説『タイタニックでどう生き延びるか』(2011)⁶、オペラ『闇の奥』(2011)⁷やオペラ『密偵』(2013)⁸などである。コンラッド自身が小説とエッセイ以外に手を染めた文学形式は、戯曲のみである。成功しているかどうかはさておき、「もう一日」⁹、『密偵』¹⁰、「笑うアン」¹¹の三作品を自ら戯曲化している。さらに、『オックスフォード名エッセイ集』に収録されているコンラッドの唯一のエッセイは、何と「劇の検閲」¹²である。

このように欧米においては、コンラッドの生存中から今日にいたるまで、映画化以外にも彼の作品の戯曲化や歌劇化が試みられて来た。しかし、ジーン・モア編『コンラッド映画論』(1997)によると、こと「フォーク」に関しては映画ですら、1968年制作のポーランド映画「フォーク」(60分)が一本あるのみである¹³。そのような作品を日本で上演することに、いったいどのような意味があるのだろうか。

狂言役者の野村萬斎氏は、最近自ら演出して主演を演じた『マクベス』についてそのプログラムの中で次のように述べている。「四季鮮やかな日本、自然の脅威を知る日本、この土地で生きる私たち日本人の感性やアイデンティティを、本作を通して、海外の方に伝えることができればと願っております」¹⁴。これに対して、今回上演された「フォーク 回想」のチラシの中にも、次のような語り手のセリフからの引用とそれに続くコメントがある。

「小さなボートや弱い船を襲う難局は、密接な接触や、差し迫る波の脅威によって、人間を一つに引き寄せる。しかし、フォークの場合、そこには安全で便利で広い船が有った。ベッド、食器類、居心地の良い船室、コックの調理場、それが飢餓と言う無慈悲な亡霊に侵され、支配され、取りつかれていたのだ」

差し迫った恐怖は人間の「連帯の面」を強調します。そして多くの演劇や映画はそこを好むと思います。しかし、より現実の世界、安全で広く隠れる場所が十分にあり、画策や策略が可能な世界、そこで重要なものが徐々に少しずつ奪われていく時、真実とは何なのか？（中略）そんな状況での人間の赤裸々な姿、それをしっかりと描きたいと思います¹⁵。

これを読むと、この作品を取り上げるに際して製作者が、よく問題にされるカニバリズム（人肉嗜食）などではなく、人間の絆の崩壊というテーマに注目していることが分かる。このように、東日本大震災を経験したばかりの日本人らしい視点が見出されるところが、今回の公演において評価されるべき点のひとつなのではないだろうか。

注

- ¹ 一人芝居「フォーク 回想」プログラム(2)。
- ² 岡田久早雄 (2012)「岡田久早雄プロデュース 反省の弁「フォーク 回想」」。
(<http://combray.blog.fc2.com/blog-entry-23.html>)
- ³ 吉岡栄一 (2002)『亡命者ジョウゼフ・コンラッドの世界—コンラッドの中・短編小説論』南雲堂フェニックス：223。
- ⁴ “Out of the Heart of Darkness” Puppet Theatre Barge (2007)
- ⁵ Catherine Anyango. “Heart of Darkness’: A Graphic Novel.” SelfMadeHero (2010)
- ⁶ Frances Wilson. *How to Survive the Titanic, or The Sinking of J. Bruce Ismay.* Harper (2011)
- ⁷ *Heart of Darkness.* Music by Tarik O’Regan and libretto by Tom Phillips (2011)
- ⁸ *The Secret Agent.* Music by Curtis Bryant and libretto by Allen Reichman (2013)
- ⁹ *One Day More* (1904). 短篇「あした」(“To-morrow” 1902) の戯曲版 (全1幕)。
- ¹⁰ *The Secret Agent* (1923). 長編『密偵』(*The Secret Agent* 1907) の戯曲版 (全3幕)。
- ¹¹ *Laughing Ann* (1920). 短篇「ドルのために」(“Because of the Dollars” 1914) の戯曲版 (全2幕)。
- ¹² Joseph Conrad. “The Censor of Plays.” *The Oxford Book of Essays.* John Gross ed. Oxford University Press, 1992: 326-329.

劇評 「フォーク 回想」

- ¹³ Gene Moore ed. (1997) *Conrad on Film*. Cambridge: Cambridge University Press: 283.
- ¹⁴ 2012年再演版『マクベス』プログラム(2)。
- ¹⁵ 一人芝居『フォーク 回想』チラシ(裏面)。

(おくだ ようこ 跡見学園女子大学教授)